

対話型アート作品鑑賞手法による
大学生の対人コミュニケーション力育成

宗 像 花 草*

Developing Communication Skills of
University Students through Dialogue-Based
Art-Appreciation Techniques

MUNAKATA Kaya

Abstract:

This paper discusses the possibilities of applying dialogue-based art-appreciation techniques for developing university students' communication skills. As today's global society is increasingly expecting the participation of young adults who can communicate and interact with others actively and deeply, it is significant to examine the efficacy of such practice. As part of the author's course on communication and art, students facilitate and participate in conversations about artworks and reflect on their communication practice in their post-activity written feedback. The examination of the feedback from the students who took the course in the 2022 spring semester revealed the following themes: "creation of unity", "acceptance of difference", "cultivation of multiple perspectives", "profound understanding through the five senses", "relaxing, fun atmosphere" and "equal relationship", through which the students had meaningful communication with their peers. These themes resonate with *Wa-kei-sei-jaku*, the four principles of the traditional Japanese tea gathering. The communication practice of applying dialogue-based art-appreciation techniques has the potential of establishing democratic learning opportunities which will help develop students' ability to communicate and collaborate with others with diverse backgrounds and values, which is essential for those who are expected to play an active role in today's global context.

キーワード：対人コミュニケーション、対話型アート作品鑑賞、芸術教育、和敬清寂

* 神田外語大学 外国語学部英米語学科 非常勤講師

1. はじめに

本研究の目的は、美術館における対話¹⁾によるアート作品鑑賞(以下、対話型鑑賞)手法を応用したコミュニケーション実践が、大学生の他者と積極的に関わる対人コミュニケーション力にどのような効果をもたらすのかについて調査することである。デジタル技術や製品に囲まれて育ってきたミレニアル世代やZ世代と呼ばれる現在の大学生は、画像や動画などのビジュアルイメージを活用する能力に長け、実際に、ビジュアルイメージは、彼/彼女らのコミュニケーションの大半を仲介している。例えば、SNSでは、イメージ化された彼/彼女らのコミュニケーションは、大量に産出され、時空を超え、不特定多数の他者によって瞬時に消費されていく。現代の若者が、互いに顔をつき合わせ、自分の思いを他者に丁寧に伝え、他者の思いにじっくりと耳を傾け、共に意見を交わすことは稀であろう。しかしながら、現代のグローバル社会では、世の中や他者と積極的に関わることのできる市民(engaged citizens)の参画が求められている(World Savvy, n.d.)。このような時代に、五感と想像力を駆使してアート作品について他者と対話することは、ビジュアルイメージに親しみをもち成長してきたミレニアル世代にとって取り組みやすい上に、現代社会が求める市民の育成をも可能にするのではないかと考える。筆者は、美術館でエデュケーターとして対話型鑑賞のファシリテーションをしており、実際に、このような鑑賞が、多様な参加者同士が積極的に他者と関わる有意義なコミュニケーションの機会となっていることを認識している。このことから、本学内容重視型科目「英語総合 III Communication through Art」で、対話型鑑賞手法を応用したコミュニケーション実践を、2018年度春学期より取り入れてきた。その結果、これまでの履修生から、クラスメートとアート作品について考えや思いを交わし、相互理解を図りながら共に作品を理解していくことは、豊かなコミュニケーションの機会であったと、レポートや期末アンケートにて言及があった。そこで本稿では、2022年度春学期本科目履修生

1) 本研究での「対話」は、会話を通じた共有探究とし、Burnham & Kai-Kee (2011)の美術館教育文脈における対話の定義を採用する。その詳細は、先行文献章を参照されたい。

が残した対話型鑑賞手法を応用したコミュニケーション実践活動での学生自身の取り組みの振り返り記述を分析し考察する。このような実践を通して、履修生がどのように他者と積極的に関わることができるようになるのかについて調査し、この実践の有用性を明らかにし、さらなる可能性についても示唆したい。

2. 先行研究

情報、知識やスキル活用のための主なりテラシーが、デジタル化され、聴覚と視覚に基づくようになって久しい現代 (Doyle & Singh, 2006) では、人々のコミュニケーションの大半は、画像や動画などのビジュアルイメージによって仲介されている。とりわけ、幼少期からデジタル技術や製品に囲まれて成長してきたミレニアル世代と呼ばれる大学生を含む現代の若者は、「スクリーンの世界」(Kress, 2009: 6) でコミュニケーションをとり、その普遍性やネットワークは拡大する一方である。彼/彼女らのデジタル化された日常的な他者とのコミュニケーションの多くは、ビジュアルイメージとして大量生産され、時空を超えて瞬く間に消費されていく。教育の分野においても、教育者は、そのような世界に生きる若者学習者が、どのように自身を取り巻く世界を知り、学び、経験するのかを理解するよう求められている (Suess, 2018)。

一方で、このような現代の若者たちのコミュニケーションのあり方は、世の中や他者と積極的に関わることのできる市民 (engaged citizens) の参画を求める現代のグローバル社会 (World Savvy, n.d.) の潮流と異を呈していることも否めない。World Savvy (ibid.) は、“engaged citizens” が、相互に連結した今日の世界を渡り歩き、成功するために必要な態度や価値観を、次のように定めている。

- ・新しい機会、発想、考え方に対する寛容さ
- ・他者との関わりを重んずる気持ち
- ・アイデンティティと文化に関する自己認識
- ・違いの尊重
- ・多角的な視点の受容

- ・不確かな状況への適応
- ・自身を取り巻くものごとに関連付けた自身の人生や文脈への内省
- ・既成概念にとらわれない心
- ・順応性と認識力
- ・共感力
- ・謙虚さ

これに共鳴するように、OECD Future of Education and Skills 2030 Project (OECD 教育とスキルの未来 2030 プロジェクト) も、現代の若者が責任ある市民となるために、社会的・感情的スキルを、最重要スキルの一部として掲げている (OECD, n.d.)。さらに、同プロジェクトは、芸術 (arts) を積極的に活用することで、これらのスキルの育成が可能になるとも主張している (ibid.)。

芸術教育、カリキュラム改革における米国の代表的な研究者である Eisner (2002) は、“10 Lessons the Arts Teach” (芸術が教えてくれる 10 のこと) において、芸術教育の有用性を主張する。その 10 項目のうち主要なものを以下に挙げる。

- ・正解やルールではなく、判断力が優先される。
- ・問題の解決方法や問いへの答えは、一つに限定されない。
- ・世の中の見方や解釈の仕方には、様々な視点が存在する。
- ・予期せぬ可能性に身をゆだねることができるようになる。
- ・芸術は他では得られない経験をもたらす、その経験を通じて、感情の豊かさを発見することができる。

このような芸術教育の有用性を裏付けるように、近年、対話型鑑賞が日本の博物館や美術館、その他の教育現場においても盛んに導入されている (齊藤、2011)。対話型鑑賞は、通常、進行役の導きのもと、参加者が自由な発言を積み重ねて、作品を理解していく会話形式で展開していく。また、進行役は、鑑賞と作品理解を深めるために、作品や作家についての文脈情報を適宜提示していく (Burnham & Kai-Kee, 2011; Hubard, 2020; 大高, 2020a)。Burnham & Kai-Kee (ibid.) によると、対話は、オープンで会話の即興的な要素を備えているものの、単なる会話より一貫して目的意識が高

い。対話型鑑賞においての目的は、「共有探究—理解を追求するための見方と考え方の他者との探究」—であるから、参加者は、共に自らの対話を有意義な結論に導き、作品への理解と幅広い解釈を得ることに関心を示す (ibid.:87)。このような対話型鑑賞は、自由な発言や協働的な学びを促すだけでなく、他者と共に作品をどのように解釈するのかという意味付けを可能にする。発見と好奇心の精神に導かれる探究的な対話は、その過程において、参加者が自身の考えや思いを他者のそれらと照らし合わせ、比較し、調整しながら進めていく実験的なフォーラムとなる (ibid)。本稿の対話の概念は、この Burnham & Kai-Kee (ibid.) によるものとする。

対話型鑑賞は、構成主義的な学習理論に依拠する。例えば、ミュージアムでの学びは相互作用的であり (Hooper-Greenhill, 1994)、知識は一方的に与えられるのではなく、学習者が積極的に構成していくものであり、その過程で主に自身の経験を基盤に他者との交流を通して世界を知るという (Hooper-Greenhill, 1994; Hein, 1998; Falk & Dierking, 2000)。このように学びを社会的な相互作用とする考えにおいては、知識は社会的に探究し構成され、学習者はその構成に積極的に関与し、知識を共有する (Vygotsky, 1978)。

3. 調査の概要

3.1. 科目「英語総合 III Communication through Art」の概要

英米語学科の選択必修科目英語総合 III の一つである本科目は、指導言語を英語とする内容重視型科目で、2年次で履修する者が若干名いるものの、主に3、4年次が履修する。2022年度春学期は、本科目を2セット実施し、計45名が履修した。本科目では、アートを介したコミュニケーション力の育成や、コミュニケーションツールとしてのアートの可能性の探究に主眼が置かれている。

週2コマ、半期完結型で計30回実施される本科目は、理論編と実践編に二分され、前者では、対話型鑑賞はじめとする美術館教育によく関連づけられる代表的な学習理論について英語で読み、ディスカッションをする。Gardner の「多重知能理論」、Vygotsky の「発達の最近接領域」や Wenger の

「実践共同体」についての英語解説テキストや、Deweyの著書 *Democracy and Education* におけるコミュニケーションについての一考察を原文で読むことにも挑戦する。実践編では、参加者中心の対話型鑑賞手法を取り入れたコミュニケーション活動を段階的に導入し、最終的に、履修生は、自身が選定したアート作品についての対話を、設定したテーマに基づいて進行する。対話の参加者は3～4名で、対話時間はおよそ10～12分。進行役は、自身で選定したアート作品一点をタブレット表示したものを見せながら、予め用意した作品理解を促すようなオープンエンドの質問を実際の対話の流れに沿って適宜選択して尋ねながら進めていく。その際、進行役は、参加者の自由な発言を引き出したり、参加者の発言に反応を示したり、参加者同士の意見交流を促したりする。本実践は、アートの知識を得ることが第一目標ではなく、自由な発想に基づくコミュニケーションに焦点を当てているため、作家や作品に関する文脈情報の提示は、対話中に織り交ぜるのではなく、対話の終盤に進行役から提示することになっている。進行役の力量によっては、対話中に巧みに情報を提示することもある。図1に2022年度春学期の履修生(S12)の進行プランを、一例として示す。また、各履修生は、クラスメートが進行する対話にも参加者として参加する。対話の進行や参加は、全て英語で、メンバーを替えて複数回行う。その後、対話型鑑賞手法を応用した一連のコミュニケーション実践についての振り返り記述を含む期末レポート(英語)を提出する。

図1 S12 作成の進行プラン（原文ママ）

選定作品	“Portrait of Pere Tanguy” Vincent van Gogh ²⁾	設定 テーマ	Japonism/Ukiyo-e admiration/respect
進行用質問	1. What is depicted in this artwork? 2. Who is this man? 3. What do you think the relationship between the artist and this man is? 4. What do you imagine from this artwork? 5. What do the pictures on his background represent? 6. Why did the artist draw some Ukiyo-e in this artwork? 7. Have you ever seen this Ukiyo-e? And do you know who drew them? 8. What do you think attracted him to Japanese Ukiyo-e? 9. How do you feel about his admiration for Japan?		
作家・作品 情報	The title of this artwork is ‘Portrait of Pere Tanguy’ (タンギー爺さん). This was drawn by Van Gogh. The model of this old man is ジュリアン・フランソワ・タンギー, who was a art-dealer and supplier of art materials in Paris. He was understanding of poor artists and provided them with almost no payment, almost free for art materials, like ink, pen, paper for painting, etc. So, it is said that Van Gogh respected him, タンギー爺さん. And other artists also regarded him. And in this artwork, he also drew some Japanese Ukiyo-e. Some of them are imitations of Utagawa Hiroshige’s work. Hiroshige is one of the famous Ukiyo-e painters in Japan. Gogh admired Japanese art, especially Ukiyo-e. My interpretation for this artwork is Gogh wanted to be a kind person like タンギー爺さん and wanted to be a painter like Ukiyo-e painters. So, it can be said that this work is full of respect and admiration. That’s why I set ‘admiration’ and ‘respect’ as themes.		

3.2. データ

2022年7月末に43名の履修生から期末レポートの提出があった。このレポートにおける対話型鑑賞手法によるコミュニケーション実践活動についての振り返り記述を、質的に分析し考察する。履修生には、一連の実践活動で感じた利点と欠点を、自由に記述してもらいたい旨を予め伝えてあった。次章では、履修生の振り返り記述から浮かび上がった6つの主要

2) 「タンギー爺さんの肖像」（ゴッホ作）は、パリロダン美術館所蔵。https://www.musee-rodin.fr/en/musee/collections/oeuvres/pere-tanguy

なテーマ(パターン)を提示する。レポートは英語で書かれているため、本稿で提示する履修生の記述は、筆者による日本語訳である。個人が特定されないよう秘匿性の確保には細心の注意を払い、履修生をS1、S2、S3などと記号で表記する。

4. 結果

4.1. 一体感の創出

ビジュアルイメージは若者にとって身近であり、またアート作品についての対話は自由な感じ方、見方、解釈を許容するため、彼/彼女らのあいだで円滑な交流が可能になる。アート作品については、正解不正解に縛られずに自由に発言できるため、妙な中断や戸惑いがなく、オープンで生き生きとした交流が広がる。

- ・アートはコミュニケーションを円滑にする潤滑油。気軽にコミュニケーションでき、会話³⁾が広がる。(S1)
- ・オープンなコミュニケーションとなり、皆が自由に発言できる。(S2)

さらに、対話内容が、対象のアート作品に焦点化されるため、異なる考えや特性をもつ他者との交流ではあるが、比較的容易に実行することができる。

- ・アートという共通のトピックがあるため、話しやすい。(S3)
- ・ビジュアルがあると話しが焦点化されるので、話が弾む。(S4)

また、視覚情報であるアート作品の介入により、各人の興味、好み、経験が可視化され、お互いに対する興味を抱き易く、共通理解が促進される。結果、参加者は、他者との対話を通じた交流に対して前向きになり、良い人間関係を築くことができる。

- ・共通の話題が増え、相手の興味や好みが分かるので、友だちが作り

3) 履修生の記述には「会話」という語が散見されるが、Burnham & Kai-Kee (ibid.)の対話の定義に基づく対話型作品鑑賞体験のことを指す。

やすい。(S5)

- ・ 共通の経験について笑ったりして会話を楽しんだ。他者に話をする
ことが心地よく感じ、良い関係が築けた。(S6)

このような友好的な交流では、参加者が自身の意見を伝え、またお互いの意見に興味を示し、それを聞き入れ、質問や助言をしながら交流を続けていくという相互作用的なやり取りが頻繁に見られる。

- ・ 会話は一方通行ではないことを改めて認識し、話すだけではなく、相手に質問したり反応したりすることが大事だと思った。(S7)
- ・ 互いの意見に興味をもち、受け入れ、助言し、自身の考えに磨きをかけることができる。(S8)

4.2. 差異の尊重

皆が正解不正解に囚われずに、自身の意見を自由に形成し発言することで、各人の違いが際立つ。この違いは、決して対立させるのではなく、平等に受容されるため、皆がお互いを理解、尊重し、違いに寛容になる。

- ・ アートは自由なので、皆の自由な発言から、違いが際立つ。(S8)
- ・ 自分に自信をもち、同時に他者の違いに寛容になれる。(S2)
- ・ 他者の意見を受け入れることができるようになる。皆異なる感性、
考え、背景、強みをもっている。(S12)
- ・ 多様な他者を理解するには、多様な考えを受容するアートについて
話すことは効果的だ。(S13)

違いとして、多くの場合、考え方や、感性、特性、長所などが挙げられたが、次の記述からは、さらなる多様性の包摂の可能性も示唆されている。

- ・ 国籍、年齢、ジェンダー、教育レベルなどの差異を超えてコミュニケーションできる。(S14)

ここに、多様な考えを受容するアート作品について対話することの一つの大きな意義がある。

4.3. 多視点の獲得

共有探究である対話では、違いが温かく受容されるため、各人が他者か

らの目を憂慮せずに、自身の長所や特性を発揮できる。また、異なる他者とさまざまな意見を共有することで、多視点の吸収による視野の拡張や、新たな知識や価値観の獲得が可能となる。

- ・皆が長所を生かすことで、さまざまな意見交換になる。(S9)
- ・多視点を吸収することで、自身の視野を広げることができた。(S5)
- ・他者の思いや意見を知ることで、新たなものの見方が生れた。(S10)
- ・他者とのコミュニケーションを通して、考え方が変わり、経験を広げることができる。

さらには、自身と異なる他者との協働を通して、一人では解決できない課題を解決することができる。

- ・異なる考えをもつ相手を受け入れ、協働することで、一人では解決できない課題を解決することができる。(S11)

4.4. 五感を駆使した深い理解

アートについての対話では、第一に、参加者は自身の主観的な思いや考えを伝えたり、またそれらを客観的に捉えたりできる。自分自身が一体どのような人間であるのか自身の根幹を見つめたり、自身の長所を見出したりする。

- ・普段物事を深く考える機会は稀で、アートについて話すことは、自分自身を見つめることだった。(S15)
- ・アートについて話すことで、自分がどんな人間で、どんな人間ではないかが分かり、自分の強みを見出すことができる。(S10)

また、相手も自身の感情、考え、経験を表現することから、彼/彼女がどのような人間であるのかを考える他者理解への前向きな姿勢も醸成される。

- ・意見や感情を伝え合うことで、互いの人柄を深く理解できる。(S16)
- ・経験を共有することで、他者のことが理解できる。(S6)

他者理解は、自身と他者の比較によりなされることが多く、他者理解と

自己理解はイコールの関係である。

- ・相手を理解しようと、良い聞き手になるよう努め、他者の異なる意見を知り受け入れることは、自己理解にもつながる。(S17)

他者へ傾聴し、彼/彼女らの感じ方や考え方を知り、受け入れることによって、他者への共感力が生まれる。人は他者に共感されることに喜びや安心を感じずにはいられない。

第二に、自身について他者に理解してもらうには、相応の自己開示が必要とされる。しかしながら、心を開いて自己開示するには、多くの場合不安や困難を伴う。ところが、アート作品の解釈には正解不正解に拘る必要がないため、自身を偽ることなく話すことへの抵抗感が軽減される。お互いが心を開いて、感情や考えを言語化したり、パーソナルな話や質問をしたりして、自己開示ができる。

- ・アートには正解不正解がないため、本心で話すことができる。普段は、自分をよく見せようとして、本心で話すことは稀だ。(S1)
- ・皆が個人的な経験を共有してくれるから、自分もそうすることができる。アートがあることで、安心して自己開示できる。(S2)

第三に、このような素直な自己開示には、アート作品について沸き起こる感情や考えに加えて、個人的な経験の共有も含まれる。自身の経験を相手に伝えることは、引き換えに相手の経験や、その経験に端を発する相手の思いや考えを共有することになる。また、自身の経験を豊かに伝え、相手の豊かな経験に耳を傾け、照らし合わせることで、両者の考え方における変容が期待できる。

- ・経験を他者と伝え合うと、自分の考えが変わっていくことに気づく。(S16)

次に、アート作品についての対話は、抽象的な事柄にも及ぶため、深い思考を伴うコミュニケーションとなる。

- ・アートは抽象的なことも多く、事実について話すのとは違い、より深く考える機会になる。(S17)

このような清からで深い対話では、五感を駆使して他者と感情や考えを共有することで、新たな視点や発見が生まれ、それらを受容していく過程

で想像力が豊かになる。

4.5. 穏やかで楽しい雰囲気

第一に、対話を通してアート作品に対する見方、感じ方、考え方を深化・拡張し、他者と共に作品解釈のための意味形成をすることにおいては、皆が自由に発言することができる。本コミュニケーション実践においては、相手のどんな意見も批判せず、聞いてみるという前提を皆が共有していたこともあるが、アートの特別な知識は不要で、幅広い解釈が受容されることから、間違えを恐れることなく、対話は楽しい雰囲気の中で繰り返しられる。

- ・間違えたり、異なる意見をもつことを恐れる必要がない。(S18)
- ・ルールがないので、アートについて話すのは、ただただ楽しい。(S2)

また、皆が異なるという大前提のもと、お互いに思いやりをもって接し、和やかな雰囲気が醸成される。

- ・ユニークな意見を言っても、否定されない。皆の意見が面白く新しいと受け入れられる。(S19)
- ・他者に思いやりをもって反応することで、穏やかな雰囲気になった。(S20)

第二に、楽しく和やかな対話では、参加者の緊張が緩和される。特に、初対面の相手との交流が苦手なタイプや内向的なタイプの参加者でも、安心してまたは積極的に参加したり、他者と打ち解けるまでにあまり時間を要さなかったりする。

- ・自分は内向的で、普段は人と話すまで時間がかかるけれど、アートという視覚情報の仲介があると、安心して積極的に話に参加できた。(S21)

4.6. 平等な関係性

日常生活のさまざまな場面で、年齢や学年などの上下関係に敏感な大学生が、そのような権威性を伴うような関係性を超越して、平等で友好的な

関係性を構築することができる。

- ・違う学年、違う趣味の人とも話しやすかった。(S22)
- ・他の授業ではあまりない異学年交流があり、アートの力だと思った。(S16)

また、アートの専門知識を必要としないことから、参加者には平等な発言の機会が与えられ、「知っている人」「できる人」というように一部の参加者に過度の注目や賞賛がゆくことがない。

- ・アートについて詳しい人など特定の人が中心になることもなく、皆が自由に参加できる。(S23)

このように、日本の大学授業では珍しい異学年交流や、異なる興味、趣味や知識をもつ者同士の交流が活発になる。加えて、異なる者同士が楽しく和やかな雰囲気の中で展開する対話では、批判的な発言への肯定的な姿勢が見受けられる。

- ・かつては、他者からの批判を理解しようとせず、ただ悲しんでいたけれど、批判に対しても穏やかになり、視野が広がった。(S7)

他者に同調しがちな日本の大学生にとって、アートの解釈には正解不正解は重要ではないという前提から、他者の意見に建設的なフィードバックを示すことも容易であるという。

- ・アートに正解はないため、同調しがちな日本人も、他者の意見を批判することができる。それでこそ良いコミュニケーションだと思う。(S13)

5. 考察

本稿では、対話型鑑賞手法を応用したコミュニケーション実践が、大学生の他者と積極的に関わる対人コミュニケーション力にどのような効果をもたらすのかについて調査した。その結果、このようなコミュニケーション実践の有用性として、「一体感の創出(テーマ4.1)」「差異の尊重(テーマ4.2)」「多視点の獲得(テーマ4.3)」「五感を駆使した深い理解(テーマ4.4)」「穏やかで楽しい雰囲気(テーマ4.5)」「平等な関係性(テーマ4.6)」というテーマが抽出され、学生たちが積極的に他者に関わり、コミュニケーション

ンをとっていたことが分かった。

このことは、Otaka (2016) の対話⁴⁾に重点を置いた「和敬清寂」に基づく美術館教育の教授法の有用性と軌を一にするのではないかと考える。この教授法を基に実施される教育プログラムは、文化的に多様な背景をもつ参加者が、五感を駆使して新たなことを学ぶためのアート鑑賞と制作からなり、双方において、エデュケーターを含む参加者は対等な仲間として位置づけられ、対話を主な手法として共に学ぶ (ibid.)。「和敬清寂」という考え方は、安土桃山時代の大茶人千利休によって提唱され、茶道における人間の心がけであり、茶道の基本理念である (久松、2007)。茶道の世界では、「和」はお互いに心を開いて仲良くすること、「敬」はお互いに敬いあうこと、「清」は目に見えるものと心が清らかであること、「寂」はどんなときも動じないこと、と説明される (裏千家、n.d.)。

Otaka (2016) の「和敬清寂」の教授法では、「和 (harmony)」は、多様な参加者が共通のアート体験を通して調和と一体感をつくり上げることである (ibid.:45)。しかしながら、「和」とは、決して参加者皆が同じであるべきだということではなく、穏やかな雰囲気の中で各人が自身の考えを述べる機会であるとする (ibid.:45)。主に「円滑な交流」「共通理解と良好な人間関係」「相互作用的交流」が指摘された、本研究の「一体感の創出 (テーマ 4.1)」がこの解釈に当てはまる。「敬 (respect)」は、参加者がお互いに抱く尊敬の念で、だれのどんな考えや問いも尊重される (ibid.:46)。本研究では、「差異の尊重 (テーマ 4.2)」として「自身に対する自信」「多様性の理解」、また「多視点の獲得 (テーマ 4.3)」として「視野の拡張」「長所を生かした協働」というような同様の結果が明らかになった。「清 (purity)」は、清められた五感を駆使し心清らかな参加者が、共に考えを共有し、推論的に思考や感情を促進すること (ibid.:48) で、これは「五感を駆使した深い理解 (テーマ 4.4)」という本研究の結果と、「自己・他者理解」「自己開示」

4) Otaka (2007) は、対話を参加者の興味と疑問に基づく自由な協働探究であると定義し、参加者間には対等の関係が必要であるとする。また、このような探究は、その始まりにおいて、参加者の誰もがその結末を予測することができない知的な冒険である (大高、2022b)。

「経験の共有」「他者への傾聴」「想像力の向上」という点において共鳴する。「寂 (tranquility)」は、参加者の内省的な学びを促すシンプルで、静かで、ゆったりとした、平和な雰囲気を目指す (ibid.:50)。本研究でも、「穏やかで楽しい雰囲気 (テーマ 4.5)」「平等な関係性 (テーマ 4.6)」という結果が浮かび上がり、これらのテーマ下では、「楽しい雰囲気」「緊張の緩和」「異学年交流」などが挙げられた。

対話を中心とした他者とのアート体験は、日常的にビジュアルイメージに慣れ親しんでいる若者にとって、受け入れやすい。さらに、自由な雰囲気を醸成し、幅広い解釈を可能にするアートの特性からも、参加者は、共に学ぶ同等の仲間として、自由な考えや思いを共有し、新たな解釈の可能性を探究することができる。こうして、参加者は、民主的な学びの共同体を形成する (ibid.; 大高、2020)。民主的であるとは、「共同生活の一様式、連帯的な共同経験の一様式」⁵⁾のことであり (Dewey, 1916/2012: 94)、民主的な共同体には、「共通理解一目的、信念、願望、知識などを共有すること」が欠かせない (ibid.: 7)。そして、人は、他者との対話というコミュニケーションを通して、共通理解を図ることができるのではないか。Dewey は、社会生活はコミュニケーションと同一であるだけでなく、すべてのコミュニケーションは (従って、すべての真の社会生活も)、教育的であると主張する (ibid.: 8)。対話型作品鑑賞手法を応用したコミュニケーション実践では、参加者は、他者と考えや思いを共有しながら共通理解を深める中で、自身の態度や経験に対するまなざしに変容が生じているのを実感し、成長することができる。つまり、共に生きるという過程そのものに教育的効果がある (ibid.: 9)。他者と共に生きること—本研究では共有探究すること—によって、参加者の経験は拡大し啓発され、想像力が刺激され豊かになり、生き生きとした発言と思考を育むことへの重みが生じる (ibid.: 9)。アートとの出会いは、個人が、自身の経験を明らかにしながら世の中に積極的に関わろうとする中で、他者と手を取り合える人間となれるよう育成する (Greene, 1995: 382) ことができるのではなからうか。

5) デューイ (松野安男訳)「民主主義と教育 (上)」142 頁記載の訳語。

6. まとめと今後の課題

本研究は、多少なりとも、対話型作品鑑賞手法を応用したコミュニケーション実践の有用性の全体的な傾向を捉えることができた。このようなコミュニケーションの実践は、積極的に世の中や他者に関わることのできる現代社会の一員として、今後の活躍が期待される大学生のような若者にとって、有益であることがわかった。しかしながら、履修生の母語ではない英語による記述の分析を中心に行ったことで、彼/彼女らの真意や細かなニュアンスが反映されていない可能性も想定されることは、本研究の限界である。今後の課題は、この限界も踏まえて、本研究で明らかになったことを軸に、アートを介したコミュニケーション実践の有用性と、考察章で指摘した Otaka (2016) の「和敬清寂」を基本理念とする対話を通した美術教育教授法とのより具体的な接合点を見出したい。また、教育の分野において「対話」という語は広く流布しているものの、その概念は多岐にわたり、場合によってはスローガン化し形骸化していることもある。そのため、アートとコミュニケーションの融合が研究テーマの筆者にとって、しかるべき対話とは何かについても、さらに追求することが必要であろう。

参考文献

- 裏千家 (n.d.) 「はじめてのお茶」 <http://www.urasenke.or.jp/textb/shiru/beginer/> (2022年9月4日閲覧)
- 大高幸 (2022a) 「ワークショップ: その理念と人文科学系博物館における実践」『改訂新版博物館教育論』放送大学振興会、97-113頁
- 大高幸 (2022b) 「家族と博物館」『改訂新版博物館教育論』放送大学振興会、186-202頁
- 大高幸 (2020) 「美術館家族プログラムのこれまでとこれから—本インタビュー結果及び意識」『美術館と家族: ファミリープログラムの記録と考察』公益財団法人石橋財団アーティズン美術館、187-210頁
- 斉藤真奈美 (2011) 「対話型鑑賞教育の課題」『中国学園紀要』10号、19-27頁
- デューイ、ジョン (松野安男訳) (1975) 『民主主義と教育(上)』岩波文庫
- 久松真一 (2007) 『茶道の哲学』講談社学術文庫
- Burnham, R. & E. Kai-Kee. (2011) *Teaching in the art museum: Interpretation as experience*. Los Angeles: Getty Publications.
- Dewey, J. (2012) *Democracy and education*. Hollywood, FL: Simon and Brown. (Original work

- published 1916)
- Doyle, C., & Singh, A. (2006) *Reading and teaching Henry Giroux*. London: Peter Lang.
- Eisner, E. (2002) *10 lessons the arts teach*. www.artseducators.org/advocacy on September 26, 2022.
- Falk, J. H. & L. D. Dierking. (2000) *Learning from Museums: Visitor experiences and the making of meaning*. Lanham, MD: Altamira Press.
- Greene, M. (1995) Art and imagination: Reclaiming the sense of possibility. *Phil Delta Kappan*, 76 (5), 378-382.
- Hein, G. (1998) *Learning in the museum*. New York: Routledge.
- Hein, G. (1999) The constructivist museum. In Hooper-Greenhill, E. (ed.), *The Educational Role of the Museum* (pp. 73-79). New York: Routledge.
- Hooper-Greenhill, E. (1999) Education, communication and interpretation: Towards a critical pedagogy in museums. In Hooper-Greenhill, E. (ed.), *The Educational Role of the Museum* (pp. 3-27). New York: Routledge.
- Hubard, O. (2020) Aesthetic experience and global competence: A museum-inspired online course, *Arts Education Policy Review*, 121 (3), 2020, 119-123.
- Kress, G. (2009) *Multimodality: A social semiotic approach to contemporary communication*. London: Routledge.
- OECD. (n.d.) *OECD future of education and skills 2030 conceptual learning framework*. www.oecd.org/education/2030-project on September 27, 2022.
- Otaka, M. (2007) A case study of family art programs focusing on participants' post-program activities. Doctoral dissertation, New York: Columbia University, UMI3259255.
- Otaka, M. (2016) Museum family programmes as a model to develop democratic education: A pedagogy inspired by the principles of *Cha-no-yu*. *International Journal of Education through Art*, 12 (1), pp. 39-56.
- Suess, A. (2018) Instagram and art gallery visitors: Aesthetic experience, space, sharing and implications for educators. *Australian Art Education*, 39(1), 107-122.
- Vygotsky, L. S. (1978) *Mind in society*. Harvard University Press.
- World Savvy. (n.d.) *What is global competence?* <https://www.worldsavvy.org/our-approach/global-competence/> on September 27, 2022.